わんりぃ

192号

2014/4/1

日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
http://wanli-san.com/
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりぃ’ HPのアドレスが上記になりました。

雲南省紅河哈尼族彝族自治州建水県・日本雲南聯誼協会支援第11校「白雲小学校」のある村にて(彝族)(撮影:2011年)
(写真提供:認定NPO法人・日本雲南聯誼協会)

日本雲南聯誼協会は、経済発展から完全に取り残された雲南省山岳地域の少数民族を対象に、14年もの間教育支援活動を行っています。活動の柱となる小学校建設事業では、これまでに23校を建設、1万3千人もの子供たちに安全かつ衛生的な学習環境を提供してきました。ここでは、貧困に屈せず、明るく逞しく生きる雲南少数民族の人々やそ の生活をご紹介します。 (認定NPO法人日本雲南聯誼協会 http://www.jyfa.org/)

4月号の目次は、最終ページに掲載してあります)

北京雑感その 83

北京の食事

有為楠(ういくす) 君代

最近は、北京へ出かける時、‘わんりぃ’の友人と２人連れのことが多い私です。北京へ行く目的は、友人が「バス・地下鉄に乗りたい」、私は「北京に行きたい」と言うだけの気儘な旅です。

ある時は、地下鉄と言いながら、地上を走り北京の人たちに“軽軌(チングイ)”と呼ばれる地下鉄16号線を、始点から終点まで乗り尽くしたり、又ある時は、北京動物園パンダ舎の前で３時間近くも、唯々パンダを眺めて過ごしたりと、なかなか貴重な体験をしています。言ってみれば、北京版弥次喜多道中です。

その友人が、「有為楠との旅は、食費が安く上がる」と、否定的とも肯定的ともとれる言葉で、２人の旅を総括していました。言われて見れば、確かに、朝食はホテル近くで、近所の人々が利用する食堂に入り、各種のお粥や「豆腐脳(トウフナオ)」(暖めた豆腐に醤油味の葛餡をかけたもの)、「油条(ヨウティアオ)」(小麦粉を練って、延ばして油で揚げたもの)などを食べて、二人分５元以内で済ませます。

昼食も夕食も、結果的には手近な安食堂で済ませてしまうので、一日の食費は、結局２人で50元もかかりません。確かに、随分安く上がります。旅行中全部このようだと、侘しい限りですが、幸いなことに、北京滞在中の一日は必ず北京の友人が超豪華なレストランに招待してくれるので、「昨日あんなに頂いたから」とか、「明日ご馳走がいただけるから」とか理由をつけて、粗食に甘んじるのです。

しかし、これだけが安食堂で食事する理由ではありません。その昔、北京に滞在していた時から、私は少人数の外食を好みませんでした。友人のお母様が私と同年輩なので、その方と出歩く機会が多かったのですが、２人でレストランに入り、好きな料理を３、４品頼むと、量が多すぎて食べ切れません。そんな時は「打包(ダーバオ)」と言って、発泡スチロールの容器に残り物を入れて貰って帰るのですが、その量が食べた量よりも多い時もありました。北京に住んでいればそれも良いのですが、旅行者は「打包」することも出来ません。

そんな訳で、街の表通りに店を構える、所謂レストランには入る気がしないのです。勿論、旅の相棒がそれで良いと言ってくれるから出来ることですが。

その我々が珍しく、昨年、前門にある有名な「天津狗不理」の店に入りました。この店は包子の専門店で、何故「狗不理(コウブリ)」と言うかに諸説ありますが、一説に、「包子の美味しい香りを嗅ぐと、犬(狗)が主人の呼ぶ声も聞かない(不理)でお店に引き付けられるから」と言うのがあります。

人気のあるお店ですが、昼時を過ぎていたので比較的ゆったりしていました。さすが専門店だけあって、いろいろな餡の包子があり、７種がセットになったものを頼むと、直径10cm程のミニ蒸篭に１個ずつ入れて、重ねて蒸していたそのままの様子で、熱々が供されます。それと急須に入れた菊茶を頼んで、全部で270元でしたから、普段の昼食のお値段と比べると雲泥の差でした。

我々の隣では、年配の女性が、息子さんらしい年齢の男性３人と食事をしていました。上品な雰囲気で、服装もモダンで、ゆとりのある階層の方とお見受けしました。美味しい包子をゆったりと頂いていると、目の中に白いものが動きました。思わずその方を見ると、その女性の椅子の脇の床に、今落ちた、丸めた紙ナプキンのほかに食べカス等も沢山落ちていました。

北京の人々は昔、食事の時、食べカスは何でも床に落としていました。どんな高級なレストランでも、家庭でも、皆そうだったようです。このときも、彼らが席を立った後、テーブルを片付けると同時に、箒と塵取りを持って来て、当然のように掃除をしていました。家庭でも、食堂の床はタイルか土間で、食事が終わるとお手伝いさんが直ぐに片付けるので、何時もきれいになっていました。

最近の、床に絨毯を敷いたレストランでは、大きめな器をテーブルにおいて、食べカスをそこに入れて貰うようにしています。又、家庭でも新築のお宅は食堂も木の床にすることが多いので、食べかすはテーブルの上で纏めたり、やはりカス入れを用意したりしています。あのご婦人は、若しかしたら昔ながらの四合院で、お手伝いさんに囲まれてゆったりと生活している方なのかも知れないと、羨望の眼で見送りました。

私の調べた諺・慣用句28

水魚の交わり

三澤　統

皆さんは“水魚の交わり”という慣用句をご存知のことと思います。水と魚のように切っても切れない親しい関係、特に男性どうしの交友や夫婦間の大変親密な間柄を表すことばとして用いられますが、今回はこの慣用句の基になったエピソードを中国の故事から調べてみました。辞書にはそれぞれ以下のように載っています。

▲小学館　デジタル大辞典：

「水魚の交わり　《蜀志　諸葛亮伝から。劉備[注)]が諸葛孔明と自分との間柄をたとえた言葉》水と魚との切り離せない関係のような、非常に親密な交友」

▲小学館　中日辞典：

「如鱼得水rú yú dé shuǐ魚が水を得たかのようだ；自分と意気投合できる人物に出会う；環境が快適である」

この成語の出自は「三国志・蜀書・諸葛亮伝」の「于是与亮情好日密。关羽，张飞等不说。先主解之曰：“孤之有孔明，犹鱼之水也，愿诸君勿复言。”羽，飞乃止」(ここにおいて(劉備と)諸葛亮との交情は日ごとに深まった。関羽や張飛等はそれが不愉快であった。先主(劉備)は(二人の気持ちを)理解して彼等に言った。

「私が孔明を得たのは魚が水を得たようなものなのだ。諸君はこれ以上もう不服を言わないで呉れ給え」関羽と張飛は以後、口をつぐんだ)の部分です。

東漢の末年は、天下が大いに乱れ、豪傑が入り乱れて覇を競っていました。

その中の一人であった劉備は、自分が天下を統一してやろうという壮大な野望を抱いており、そのことを実現するために必要な人材を八方手を尽くして探し求めていました。その頃、荊州刺史の劉表に付き従って荊州に在った彼はある人から諸葛亮という賢明な人物が居ることを聞かされました。そして当時隆中の地に臥龍と呼ばれて隠居していた諸葛亮を訪ねて行き直接会って山を出てくるように頼もうとしました。

一度目、二度目は諸葛亮に会うことが出来ませんでしたが、三度目にしてやっと会うことが出来ました。(三顧の礼) 劉備は来意を説明して、自分の遠大な理想について語りました。

諸葛亮は劉備に胸襟を開いてつぎのような意見を述べました。即ち益州と荊州を奪取し、西南の少数民族とは友好を結んで行き来し、東は孫権と結び、北は曹操を征伐するという戦略方針です。そして、今後必ず蜀・魏・呉の三つの勢力が並び立つ局面となるであろうと預言しました。(天下三分の計)

劉備はそれを聞いて大いに喜び、すぐに孔明(孔明は諸葛亮の字(あざな)、以下孔明と記します。)を軍師として迎えることにしました。

孔明は精一杯劉備を補佐しましたので、劉備の信任が大変篤く重用されました。その様子を見て関羽や張飛など古参の武将達は面白くありませんでした。

そのことを知った劉備は、孔明の胆力・知謀と才能・見識が自分の天下統一の完成を助けるのに極めて重要なのだということを丁寧に説明しました。そして彼は自分を魚に孔明を水にたとえて「私が孔明を得たのは魚が水を得たのと同じことなのだよ。魚には水が必要であってお互いに切り離すことが出来ない関係なのだから諸君はもうこれ以上不平を言わなでほしい」と言いました。

それを聞いた関羽と張飛は、劉備と孔明の関係がよく理解出来るようになり、以後、不満を口にすることはなくなりました。

その後、孔明は劉備を補佐して東の孫権と結んで北の曹操を征伐し(赤壁の戦い)、荊州と益州を奪取して、次々と勝利を重ね、孔明の預言通り、蜀・魏・呉の三つの勢力が並び立つこととなりました。

〈注記〉

劉備(りゅうび)(161 ～ 223年)：後漢末期から三国時代の武将、蜀漢の初代皇帝。

イラスト　ye Lin

怪異シリーズ（31） 十五貫 Ⅱ

hé yuányuán
何媛媛

陳氏は、劉貴の言うことを半信半疑に思いながらも、最悪のことを想像しました。

「どういう男が私を買ったというのでしょう？いくら金持ちの家だとしても、日頃の貧しい生活に馴染んでしまっているのだから、金持ちはどんな生活をしているのか、私にはさっぱり判りません。これからの私の生活はどのようなものになるのでしょう。想像しようにも想像する手がかりが全くないのですから」

この先どうなるのか、考えても不安に思うだけで想像のしようもありません。

陳氏は考えれば考えるほど気持ちが沈みました。

「そうだわ、まずは自分の両親に知らせた方がいい、まずは、当分何処かに隠れたほうが安全でしょう。明日夜明けになったら急いで実家に帰って両親と相談することにしましょう」

彼女はお金が入った袋を、酔ってぐっすり眠り込んでいる劉貴の足元に置き、とりあえず必要な着替えだけを用意してこっそり家を出ました。そっと玄関のドアを閉めると、いつも世話になっている隣家の朱おじいさんの家に訪ねて行き、お爺さんに夫から聞いたことの一部始終を話しました。

「どうしたらいいでしょう。助けてください！主人は理由も説明せずに私を人さまに売ったといっています。これからのことを思うと不安で耐えられません。夜が明けたら、実家へ帰って両親に話して相談したいのです。そんな訳で今晩は泊まらせて頂きたいのですがお願いできるでしょうか」

すると朱おじいさんは

「そうか、ひどい話だなあ。じゃあ、とりあえず今夜はここで寝て、明日朝早く両親に会いに行きなさい。私から旦那さんに伝えておいてあげよう。」

おじいさんは深く同情して言いました。陳氏は安心してその晩は朱おじいさんのところに泊まり、翌朝、実家へ急ぎ向かいました。

一方、劉貴は旅の疲れから深い眠りに落ちていましたが、真夜中に一度目を覚ますと、水が飲みたくなりました。

「二姐や、お茶をおくれ」

と陳氏を呼びました。が、返事がないので、起き上がって自分で水を飲みに行こうと思いましたが、頭がまだくらくらして立ち上がれずそのまま再び寝入ってしまいました。

と、その夜、一人のならず者が現れました。彼は昼間に博打を打って、さんざん負けてしまい、夜になって、戸締りの甘い玄関がしっかり閉じていない家を狙って金になるものを盗もうと思いました。

劉貴の家の玄関にやってくると閂（かんぬき）が掛かっていません。陳氏が家を出た時、門は閉めたのですが、閂を掛けなかったのでした。その男が劉貴の家の門を押して見ると、ドアがギーときしみながら開きました。手探りをしながら忍び足で家の中に入ってみますと、寝台の上に、男が壁に向かってぐっすりと寝ているのが目に入りました。しかし、他には誰もいないようです。

男はだんだん大胆になり、机や寝床を探っている内に例のお金が入っている袋を見つけました。男は喜んで、袋の中からいく貫文かを抜き取ろうしていると、お金の音で劉貴がはっと目を覚ましました。むっくりと起き上がると泥棒の姿が目に入り、怒鳴りつけました。

「こら！ こいつ!! 誰だ!? 泥棒か!? その金を盗もうというのか!? それは生活の元手にするために、義父から借りてきたものだ。持っていくつもりか!? そんな事は許さん!」

男は一瞬びっくりしましたが、すぐ気持ちを落ち着かせ、拳を固めると劉貴に向かってゆきました。劉貴は素早く起き上がり、男が振るう拳を避けて、男に飛び掛かりお金を奪い返そうとしました。が、男はさっと窓を押し開くとその窓を飛び越しました。しかし、男が飛び込んだのは台所でした。劉貴も男の後に続いて窓を飛び越しました。

劉貴は必死で男からお金を取り戻そうとし、男は取り戻されてはなるまいとお金を守り、二人は激しく取っ組み合いました。と、取っ組み合いの

真っ最中、男は床にぎらぎらと光る鉄の斧があるのが目に入りました。素早くその斧を手にすると、劉貴の頭めがけて力一杯振り下ろしました。

それは致命的な一撃でした。劉貴の頭から鮮血がほとばしり、劉貴はばったりと地面に倒れてしまいました。男はびっくりし、しゃがんで劉貴の様子をみますと、劉貴はかすかな息をしているようでしたが、間も無くその息もとまり、動かなくなりました。

思わぬ結果になって、泥棒は空恐ろしく、早く逃げようと思いました。そして劉貴が蘇らないように、意を決してその体に2、3回斧を振るうとその場から離れました。逃げ出す途中、劉貴が寝ていた部屋を通ると、男がつかみ出したお金と、残りのお金が入ったままの袋があるのが目に入りました。

男は、部屋に散らばっていたお金を全部袋に纏めて、背負うと劉貴の家から暗闇の中へ逃げていきました。

さて、劉貴はいつもは早く起き、あれこれと忙しく立ち働くのですが、翌朝、劉貴の庭があまりにも静かなので、隣の人が不思議に思い、劉貴を訪ねました。

「劉旦那、まだ起きてないのですか？ 今日はどうしましたか？ 体の具合でも悪いのですか?」

と、声を掛けましたが、中から返事が返って来ません。不思議に思って戸を押してみますと、閂も掛かっていません。恐る恐るさらに中へ入って見ると、なんと台所で劉貴の無惨な体が横たわっているではありませんか！

隣人はすぐ近所の人々を呼びに走りました。

「大変だ！ 劉旦那が何者かに殺された！」

と叫んで走り回ると、近所の人々が次々と劉貴の家に集まって来、口々に思っていることを言い合い始めました。

「どういう事だ！ 昨夜は何があったのか！ここの奥さんが実家に帰って行ったのは知っているが、二姐はどこに行ったのだ」

二姐を泊めた朱おじいさんが言いました。

「や、実は彼女は昨晩私の家に泊まっていたのだ。劉旦那が理由も言わずに自分を売ったと言うので、夜が明けたら、実家に帰って両親と相談するつもりだと言っていた。今朝、急いで出かけて行ったが、出かける前、自分が実家に帰ったと劉旦那に伝えて欲しいと頼まれた。彼女を追いかけて連れ戻し、訊いて見たらきっと何か分かるかもな」

朱おじいさんの話を聞くと、その場に集まった人たちは相談し、陳氏の後を追いかける人と劉貴の義父の家へ報告に行く人を決め、走らせることにしました。

劉貴の義父の宅に着いた人が劉貴の訃報を知らせると、妻の王氏は泣き崩れてしまいました。

また、義父も報告人に言いました。

「どういうことだ。昨日はあんなに元気で帰ったというのに。わしから十五貫のお金を借りると、それを元手にして店を開くといって、元気いっぱいで帰っていったのじゃ。どうしていきなり人に殺されるようなことになってしまったのだ」

報告者は不思議そうな様子で

「十五貫を持って帰ったのですか。それは知りませんでした。昨夜、町にお帰りになった時はすでに暗くなった時分でしたが、友人の方とお酒を飲まれて、すっかり酔っていらっしゃった様子でした。今朝、私が劉旦那の家に行った際は、玄関が半開きになっていました。中に入って見ると劉旦那は頭からひどく血を流して亡くなっていらっしゃったのです。お金は一文も見あたらなく、二姐の姿が見えませんでした。隣の朱おじいさんの話では、二姐が昨夜朱おじいさんのところに泊めて欲しいといって訪ねて行き、その時に朱おじいさんに『劉旦那さんが自分を旦那の友人に売った』と訴えたそうです。そして今朝早く朱おじいさんの家を出、両親に事情を話して相談するために実家に帰って行ったというのです。ご近所のみなさんと相談した結果、一人が二姐をおいかけて行き、私が報告のためにこちらに来ました。どうか一刻も早く劉旦那の家に行って、二姐に会って頂いて、事情を究明していただければと存じます」

と言いました。

奥さんの王氏と王氏の父親は身支度をすると、三人一緒に、三歩を一歩にして急ぎ劉貴の家に駆けつけて行きました。

（続く）

通化市と集安 その3

寺西 俊英

前号の終わりに通化市について、「戦争に関するイメージが強く、明るい話題や名所旧跡は集安市を除くとあまりない」と書いたが、念のため友人である大連市出身の留学生の顧傑(こけつ)君に何か明るい話題はないものか聞いてみた。

彼は通化市出身の友人がいるので聞いてみると言ってくれた。一週間後彼から電話があり、「やはり通化市内は名所旧跡はあまりないそうです。ただ、集安市と通化市の間に〈五女峰国家森林公園〉があって、そこに五女峰という美しい五つの連なった山があるそうで、その名前の由来の民話を教えてくれました。朝鮮人参とも関係があります。如何ですか？」と言う。さっそくどのような民話なのかパソコンの添付資料を読んでみた。すこし長くなるが以下にあらすじを紹介したい。

長白山頂にある北朝鮮と中国の国境を示す石杭(手前が中国)(2008年6月の社員旅行で)。この山すそにオタネ人参の種をまいた？

▶五女峰の民話◀

『昔々、天界に七姉妹の仙女がいた。ある時人間界の自由な生活に憧れて七番目の仙女がだまって人間界に天降りした。そのことが玉皇大帝(道教でいう天帝)と西王母に知られたため天降りできなくなった。長女の仙女は何とかして人間界に行こうと一計を案じた。それは、母親の西王母の誕生パーティが毎年あるのでプレゼントを人間界で手に入れる、という策であった。長女は、「長白山(吉林省と北朝鮮との国境にある高さ2691mの山)にある千年のオタネ人参(朝鮮人参のこと)は食べると若返り、不老不死となるそうだがこれをプレゼントしたい」と母親に話をし、何とか行かせて欲しいと頼み込んだ。

母親は「今は天降りは厳禁なのでだめだ」と言ったが、そのうち若返りするという誘惑にとうとう負けて長女を呼び、「あなたがたの孝行が本当なら今回だけ例外を作って人間界に行かせてもよい」と許可した。長女は大変喜んだが母親は、「ただし、七女は天の規定を破ったので許可できない。そして六女は私のそばにいること」と言うのであった。

長女はやむなく4人の妹を連れて人間界に降り立った。降り立ったけれども長白山のどのあたりにオタネ人参があるのか分からない。困っていると、ある村に高台という立派な若者がいるがその者に聞くといいと言う人がおり、その人を尋ねた。

ようやく高台に会うことができてわけを話すと、彼は姉妹の心に感動し一緒に探すことになった。探すこと半月、ようやく一つ見つけることができた。もうすぐ母親の誕生日だったのでお礼を言って高台と別れ姉妹は天宮に帰り着いた。プレゼントをもらった母親はとても喜び、いつしか彼女たちへの監督は厳しくなくなっていった。

一方姉妹たちは高台のことが忘れられず、こっそりと高台の住む村のあたりに何度か天降りしたがなかなか会えないでいた。ある時もまた河辺で夕暮れ時まで待っていたが、高台は現れなかった。長女はもうそろそろ天宮に帰ろうと言ったが、五女が「もう少し待ちましょう」と言うので皆でおしゃべりをしているといつしか天に帰ることをすっかり忘れてしまった。

すると突然雷が鳴り暴風が吹き始めたのである。天門が閉まった後、母親は娘たちがいな

いことに気づき天兵を遣わして娘たちを捜しに行かせた。仙女たちが高台に会いに行ったことを知ると大帝も王母も激怒した。そこでまた天兵を遣って五人の娘全員を人間に降格の上、そこで石にさせ永遠に人間界に残させた。雷も鎮まり風もやむと五人の仙女はいなくなり、かわりに河辺に五つの峰がすくっと屹立したのである。その後人々がその峰は仙女だったことを知り、五つの峰を「五女峰」と命名した。五女峰の中で最も高い峰は、長女で「天女峰」という。以下、次女が「玉女峰」、三女が「参女峰」、この三女はオタネ人参の種を高台に渡し長白山系に散布してもらった。それがためこのあたりは朝鮮人参の名産となったと言われている。四女は「秀女峰」、五女は「春女峰」となった。以降この峰々は人々に山の幸と素晴らしい景観を与えることになった』

前号で通化市の名産はワインと朝鮮人参と紹介したが、朝鮮人参に関してこのような民話があるのは、いいものである。顧傑君に感謝したい。

さて、通化市内に入ってバスから降りてすこしぶらぶらすることにした。建設大街という大通りを歩いていると、渾江に架かっている紅旗大橋のたもとに来た。なかなか立派な橋である。渡りきるとにぎやかな商店街になる。

あちこち歩いてみたがこれと言ったところはない。マクドナルドがあったのでそこでコーヒーを飲んでいると、友人が楊靖宇の紀念館があるからそこに行こうというのでタクシーに乗ってそちらに向かった。友人に聞くと楊靖宇（1905年～ 1940年）は有名な抗日戦士だという。私は勿論知らなかったので取りあえず行って見ることにした。

紀念館というのは通化市の郊外にある楊靖宇陵園という広大な公園の中にある「東北烈士紀念館」のことだ。なかなかの構えで立派である。彼の遺体はここに安置されているという。東北烈士紀念館という名称なので楊の故郷はこのあたりかと思っていたら、河南省出身だという。名前も本名ではなく、馬尚徳と言う名であった。彼は日本が日露戦争で勝利した年に生まれたが、もの物心ついたころから中国東北部には日本軍が地歩を固めつつあった。

1928年には瀋陽で張作霖が爆殺され、1931年には満州事変が勃発。1932年には満州国建国と、混沌とした時代に入りつつあった。国に対する危機感を持ったであろう楊は、東北に向かい反満抗日（満州国に抗し、日本の支配と戦う）の活動に没入して行った。1937年7月7日に起きた盧溝橋事件から日中戦争の戦端が開かれ、彼はいくつもの戦いの先頭に立ち日本軍に立ち向かっていくのである。そして1940年にとうとう日本軍との壮絶な戦いの末戦死した。

食べるものもほとんどない中でも気力を振り絞って戦った。亡くなった時は餓死寸前であったといい、射殺された彼の胃の中からは草の根や木の皮しかなかったことから、「草根木皮」注) と言う言葉が生まれることになったそうだ。そして亡くなった場所に近いこの地に、「東北抗日連合軍の創設者で指導者」との名誉ある肩書に包まれ葬られることになった。彼の死を悼んでこのあたりは「靖宇県」という名の行政区にしている。

ハルピン市で紹介した兆麟から名をとった「兆麟街」や「兆麟公園」のように（わんりい188号参照下さい）。紀念館に入ったが展示内容は瀋陽にある9・18紀念館とあまり変わらず、どうしてここまで残虐な展示をするのだろうと悲しくなった。東北地方はこのような紀念館が多いが、子供のころからこのようなものを見れば到底日本が好きになれないであろうと思うばかりであった。このような抗日紀念館入り口の看板は江沢民元主席が書いたものをよ

楊靖宇陵園入り口付近

く見る。

次に満州国首都の遷都および終戦の翌年、1946年2月3日に起きた「通化事件」について触れておきたい。この事件は今はその傷跡はなく資料も少ないのであまり知られていないと思う。

第二次世界大戦末期日本の敗色濃厚になった時、1945年8月9日長崎に原爆が投下されたその日に、突如ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄して満州に攻め込んできた。満州国の首都であり、溥儀の住む皇宮のあった新京（現在の長春）は放棄せざるを得ず、8月初めに通化市への遷都を決定し、合わせて関東軍司令部も再編成しこの地に移すことにした。ソ連が攻め込んできた同じ日に移り、そこに続々と各地に展開していた関東軍や開拓農民たちが集まってきた。皇帝の溥儀は少し離れた大栗子（鴨緑江沿いの村）に設けた仮の皇宮に移った。しかし、8月15日に終戦となったのはご承知のとおりである。満州国最後の首都はたったの7日間であった。

ところが終戦後今度は中国国内では、国民党と共産党の対立が激化してきた。最後の関東軍司令官で赴任してきた藤田実彦はこの混乱に乗じて一気に立ち上がり、国民党と組んで共産党の八路軍と一戦を交えようとしたのである。

最終決戦は翌年（1946年）の2月3日に決定した。しかしこの計画は筒抜けになって、決行した日にたちまち鎮圧されてしまった。その時に開拓農民や市民が巻き込まれ多くの犠牲者が出たのである。死者は2千人とも3千人とも言われるがはっきりしていないようである。戦時中はもとより、終戦となってもこのような痛ましい事件がいくつか発生したという。このようになんとか歴史に残る戦闘もあるが、歴史に残らないが大きな犠牲者の出た事件や事故を戦争は星の数ほど作るのだ。戦争は決してしてはならない。

これまで書いてきたように、通化市は戦争の印象がぬぐいきれない。現在中国人民解放軍の基地があると聞いたが、ぜひとも平和なイメージの都市となるよう期待したい。

2009年3月21日、友人と私は通化駅前に到着した。一泊二車中泊の旅は終わりに近づいている。17時14分発の寝台車（K7386）まで少し時間があるので腹ごしらえすることにした。すぐレストランが見つかり、そこで普段はほとんど口にしないビールを飲みながら、改めてどの街にも他の街には見られない歴史や特色があるものだと、そしてこのような戦争は今後一切起こしてはならないと中国人の友人と話し合った。寝台車は翌日の朝8時18分に大連駅に無事到着した。

（注）

草根木皮：まっとうな食べ物ではないたとえ。飢饉などで食糧不足に陥った時の様子で表す。また漢方薬の薬材の意味もある。

【‘わんりぃ’の原稿を募集しています】

‘わんりぃ’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられてます。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又‘わんりぃ’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりぃ’に掲載の記事などについても、簡単なご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’

‘わんりぃ’は、毎年4月から新年度になります。ご継続と新年度の会費の納入をよろしくお願いします。また、新入会を 歓迎します。

年会費：1500円　入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011　‘わんりぃ’

‘わんりぃ’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりぃ’を発行し、情報の交換に努めています。入会されると

①年10回おたよりをお送りします。
②‘わんりぃ’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100（事務局）

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりぃ’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

詩人尹世霖（いんせりん）の童詩の世界①

尹世霖の童詩と出会う

金子總子

生涯学習のための放送大学が1985年に開校して2年後、52歳で入学して初めて中国語を学びました。中国語はおもしろくて、言葉だけでなく、中国の歴史、文化、生活などにも興味が広がり、中国関連の科目を次々に履修して、卒業研究は中国語を活かしたいと思っていました。

政治的、経済的に紆余曲折の激しい中で生活している人々、とりわけ子どもたちのありのままの姿に接したいとの思いから、1992年11月に卒業研究のテーマを求めて北京へ行き、新華書店の児童図書コーナーで探しだしたのが、尹世霖著『小朋友朗誦詩』(1991年　第1版・中国和平出版社)という詩集でした。

B6判の小さな本の表紙は若草色の山波の上に、ニコニコ顔のお日様と白い雲の浮かんでいる青空を女の子が両手を広げて飛んでいる絵が愛らしく、その中に詩人の目を通して、子どもの世界が、喜び悲しみ、そして夢が80首の童詩に描かれていました。

この詩集を手がかりに資料を集め、中国の現代史と尹世霖さんの半生を重ね、童詩に描かれた子どもの心を通して、その時代の特質と変遷を掴みたいと意図した卒業研究『詩人尹世霖の作品とその時代』を書きあげて、1995年3月、放送大学を無事に卒業しました。

尹世霖さん夫妻と筆者（左端）

右下の写真は、卒業した年の8月、北京市の安華里の尹世霖さんのご自宅を訪問し、卒業研究報告書をお届けした日に写したものです。夫人の趙貴玉さんは私の手作りの木目込み人形をとても喜ばれました。

尹世霖さんの童詩をご紹介していきたいと思います。

宝宝快睡着

bǎobǎo kuài shuìzháo

tiānshàng xiǎo xīngxing　zhǎ zhe dà yǎnjing
天上小星星，眨着大眼睛。

qiāoqiāo shuō jù huà　kàn wǒ tīng bù tīng
悄悄说句话，看我听不听。

yuèliang shēng de gāo　bǎobǎo kuài shuìzháo
“月亮升得高，宝宝快睡着。

bǎobǎo shuìzháo le　māma wēiwēi xiào
宝宝睡着了，妈妈微微笑。”

(1983.9.22)

【訳】

坊や　おやすみ
お空の上のお星さま　大きなおめめを瞬かせ
小さなお声で話してる　私にかすかにきこえます
「お月さまが昇ったワ　坊や早くおやすみネ
坊やが眠りついたので　ママはにっこり笑顔です」

雪花飄

xuěhuā piāo

xuěhuā　xuěhuāpiāopiāo　dà dì　pī shàng báipáo
雪花，雪花飄飄，大地披上白袍。

báipáo　báipáozhēn hǎo　dà dì chuān shàng miánǎo
白袍，白袍真好，大地穿上棉袄。

bùpà běifēng hūjiào　zhǒngzi dì dǐ shuìjiào
不怕北风呼叫，种子地底睡觉。

kāichūn zhǒngzi fāyá　qiūtiān liáng shān gāogāo
开春种子发芽，秋天粮山高高。

(1979.1.28)

【訳】

ひらひら舞う雪
雪が　雪がひらひらと舞っている
大地は　すっぽりと　白い着物で被われた
白い着物　白い着物は　すばらしい
大地は　綿入れにくるまれた
北風　吹いても恐くない
種は　地の下深く　眠っている
春には　種が芽を出して
秋には　稔った穀物が　高い高い山になる

シルクロード・砂漠を越えた冒険者達

陽光新聞社・顧問　塩澤宏宣

私にとって中国を見る視点は東の日本から西の中国、「日の出ずる国から日の没する国」というのが常識でした。ところが先日、面白い本を見つけました。表題がその本です。著者はフランス人ジャンピエール・ドレージュです。本題は「マルコ・ポーロと絹の道」だそうです。

マルコ・ポーロは「東方見聞録」で有名ですが、西欧人が見た中国について、改めて興味が湧いてきたと同時に、自分の「単眼」を恥じる次第です。

紀元前1世紀、ローマ人は西アジアのパルディア王国を通じて神秘の布、セリカ（絹）を知りました。絹はたちまちローマの貴族の間に広まり、絹を買うために膨大な出費で、一説ではローマ滅亡を早めた原因だといわれています。その絹は当時の漢帝国が北方の匈奴に献上していたものが中央アジアの遊牧民の月氏など、異民族を経由して流れていたようです。

この絹の流れが、やがて中国の中央アジア進出や西洋、インドとの交易に進展しました。やがて中国は中央アジア諸国を服従させることに成功します。中国は中央アジアへ金や絹を、中央アジアから中国へ真珠・犀の角・翡翠（かわせみ）・馬などが贈られました。

紀元97年、中国は大秦（ローマ帝国）に使節団を送ります。しかし、東アジアと西欧諸国との貿易を独占していたパルディア人は、直接貿易をされることを恐れて妨害します。そこで中国は陸路の交易をあきらめて海洋貿易に転換。紀元166年、皇帝アントニヌスはローマから紅海を横切り、ペルシャ、インド経由でトンキン（現ベトナム北部）に使者を送っています。

交易路として発展したシルクロードは、仏教伝来の道でもありました。紀元前1世紀には、このシルクロードを通ってインド巡礼の旅が盛んになり、天竺紀行を残した法顕や膨大な経典を持ち帰った玄奘三蔵が有名です。

漢の時代には儒教と道教が満遍なく普及しており、仏教の普及は遅々として進まなかったようです。道教から用語を借用し、信徒に馴染みやすい実践を提唱するなど、いろいろ工夫をした結果、中国仏教が完成しました（私は儒教や道教は思想・哲学であり、いわゆる今日の宗教とは考えていませんが）。

中国における仏教は、在留外国人、商人、使節、人質、亡命者などの間で広まったそうです。仏典の翻訳はスキタイやインド人によりました。6世紀（唐代）にはいり、玄奘は様々な解釈が生まれてきた仏教の先行きを考え、原点を探るべくインド巡礼を志願しますが許可が下りません。そこで玄奘は629年1人こっそりと旅立ちました。その後10年間インドを旅して、数多くの経典、仏像、仏舎利などを持ち帰りました。

帰路はインダス川を渡り、ヒンズークシからワハン谷を経てタシュクルガンに帰着するオアシス路を利用しました。唐末期の843年武宋帝によって廃仏令が出されて中国仏教は衰退期にはいります。同時に中央アジアとの関係も希薄になり、ベトナムは独立し、北と西の諸国からの脅威も増大します。

この間、遣唐使や留学僧によって中国仏教が日本に導入され、同時に中東・西欧の文化が中国というフィルターを通して日本へ伝えられたということは意義深いことといえるのではないでしょうか。シルクロードの終着点は日本の奈良・京都ということを実感します。

中国には仏教の他にゾロアスター、マニ、キリスト教など異国の宗教がペルシャから移入されました。ゾロアスター教はペルシャで起こりササン朝ペルシャの国教でした。6世紀には華北に拝火教の名で伝わっています。7世紀には長安や洛陽ばかりでなく、敦煌やシルクロードのオアシス都市にも寺院が建てられています。マニ教も7世紀末には中国に伝わり、仏教や道教の諸要素を取り込み「光の宗教」という名で定着しました。

キリスト教（ネストリウス派）はペルシャ、インドを経て中国に伝来し、唐の太宗（598 ～ 649）によって保護されましたが、その後の廃仏令によって急速に勢いを失いました。中国という多民族国家に宗教を定着させること（政治利用）には無理があるのでしょう。しかしネストリウス派は方向転換して布教地を中央アジアからモンゴルへ移します。この作戦は見事に当

たり、13世紀、モンゴルによる中国制覇時には華北一帯に復興します。大ハーン一族にはネストリウス派の信徒が多くいたといわれます。ところで、モンゴル人とキリスト教、ちょっと違和感を覚えませんか。更にそこにあのマルコ・ポーロが関係します。

海路の発展により、中国と中東の貿易は新たな局面を迎えます。羅針盤や航海図が作られ（中国の発明）、帆船がインド洋やペルシャ湾を行きかうようになります。中国の貿易港には外国の商人が進出しました。その結果、陸路のシルクロードは勢いをなくしました。

しかし13世紀前半モンゴル帝国が勃興し、中国を支配します。西欧へ侵略しますが、同時にアラブ人やキリスト教徒の商人のためにシルクロードを確保します。1260年、2人のヴェネチアの商人（ニコロとマッフェオ・ポーロ）が偶然にもフビライ・ハーンに接見する機会を得ます。フビライは兄弟にキリスト教国について熱心に質問します。兄弟がヴェネチアに帰国する時、フビライは教国にキリスト教に精通した学者を100人派遣するよう書簡を託しました。折悪しく教皇の交代が長引き、フビライの書簡を渡すことが出来ずに2年が過ぎます。未だに決まらないまま、兄弟は再びフビライのもとに行きます。今回はニコロの息子マルコ（17歳）が同行。マルコにとって、この旅は（1271 ～ 1295年）まで続く25年間のドラマの始まりとなります。

ヴェネチアを出発し、パミール経由でカシュガルに。タクラマカン砂漠を通ってホータン、ロプノール、敦煌を経て華北（北京）への旅は3年半を費やしました。フビライの要請であったキリスト教の教義に詳しい学者は同伴できなかったのですが、教皇からの信任状と書簡、そしてエルサレムの聖油が届けられました。

ニコロとマッフェオ兄弟はその後、カンプシオ（現甘粛省甘州）へ行き、商取引に従事したようですが、マルコは大ハーン・フビライの信任が厚く、フビライの使節として各地に派遣され、外国人の監視や税の徴収を監督するなどの業務をしていました。マルコは4種の言語に精通していたといわれます。キンサイ（杭州）には何度も派遣され、インドまで行ったそうです。ヤンジュー（揚州）統治では3年間も滞在しました。その他北京・長安・成都やチベット・雲南にも行きました。後に記した「東方見聞録」によれば、マルコは中国を「華北」と「華南」に分け、それぞれが別の国だと思っていたようです。華北は契丹を指し、華南は一般的に言われている「シナ」のことです。華北と華南すべてがひとつの国であることが認識されたのは17世紀に入ってからです。マルコがモンゴル帝国で注目したことが2つあります。

そのひとつは「紙幣」について。桑の木から作られた紙に木版で印刷し、大ハーンの印璽が押されることで、その紙が金や銀と同じ価値を持つ紙幣になることです。兌換紙幣の先祖です。もうひとつの注目点は「駅伝・宿場」の組織です。ハンバリク（ハーンの都市）つまり現在の北京から全地方へ向かう道路が完備され、1万以上の宿駅があり、命令伝達以外に旅行者の承認、役人の視察などの公務に就く人々の宿が完備され、各宿駅には馬が400頭も用意されていたこと。宿駅は20 ～ 30マイルに一駅ずつあったといわれています。

やがて望郷の想いが募ってきます。ハーンに帰国願いを出しますがなかなか許しが出ません。やがてチャンスが来ます。タタール領主（イル・ハーン家）アングンのハーンから「亡くなった王妃に代る王女を送って欲しい」との要望が来ました。ハーンはマルコを呼び「王女をアングルまで送り届けよ」と命令し、帰国を許可しました。4本マストの大きな船が14隻も準備されていたそうです。ハーンとマルコの関係が想像できます。

マルコは父と叔父の3人で海路泉州から3ヶ月かけてスマトラへ、更に18ヶ月かけてアングンへ到着。その後は陸路に変えてトルコを経由してコンスタンティノーブルを回ってヴェネチアへたどり着きました。都合3年以上かけての帰国でした。25年のドラマは終わりましたが、帰国時には母国の言葉を忘れていたといわれています。

1298年ヴェネチアはジェノヴァと戦い負けてしまいます。マルコはジェノヴァに囚われてしまいます。幸運にも獄中でピサのルスティケロと出会います。彼は優秀な宮廷作家です。「騎士物語」を残した事でも有名です。この2人の出会いによって「東方見聞録」が誕生したのです。マルコ・ポーロは1324年、妻と3人の娘に看取られ、ヴェネチアで世を去りました。

sì gūniang shān
四姑娘山 写真だより No. ㉜

春節前後の行事

写真と文／
四姑娘山自然保護区管理局 特別顧問
大川 健三

女王谷のギャロンチベット族は四川省西北部のアバ州と甘孜州に跨って数10万人居ますが、半農半牧の彼らが最も心待ちにしている伝統行事は春節です。その春節の前後に見られる多彩な行事の幾つかをご紹介します。

◆干し肉作り：春節の2カ月位前から豚を潰して干し肉作りを始めます。豚は手足と口を縛られ、喉笛と隣接する頸動脈を掻き切られて1分で絶命します。その後豚に熱湯を浴びせて体毛を削ぎ取り（写真1）、解体し、小さく切って軒に吊るして干し肉を作ります。干し肉は冬場だけでなく夏になっても貴重な食料です。この時期、豚の悲鳴が谷の彼方此方に木魂します。

◆先祖の墓参り：春節の前日、生きている世代の一つ前の世代のお墓を掃き清め線香を焚いてお参りします（写真2）。日本では夫婦が同じ墓に葬られますが、当地ではラマが占った別々の場所に葬られます。

写真1　春節の2カ月位前から豚を潰して干し肉作り

◆年越しの花火：この10年位の内に始まった行事ですが、夜の12時になると、山の斜面に点在する各農家の屋上から次々と花火が打上げられ、新年を祝います。

◆厄除けの旗の立て替え：春節の朝、平屋根の四隅で新年の安全と豊穣を祈って色とりどりの旗を立替えます。また香煙を焚いたり法螺貝を吹きます。

◆先祖の供養：亡くなってから3年間、春節の5日間に渡ってお経が読まれ、ご馳走が振る舞われます（写真3）。

◆お宮さんの初参り：集落の外れに在る廟に村の人達が揃ってお参りしたり、新年の挨拶を交わします。廟は元々ボン教の建物で殆どの村人が左周りに3周しますが、ラマ教の村人の一部は右回りします。

◆畑への引水：春節が明けない内に村人は代わる代わる用水路から畑へ水を引き込みます（写真4）。畑の中に溝を掘り水を行き渡らせますが、その時に土から掘り出される虫を目当てに、カササギが

写真2　墓を掃き清め線香を焚く

写真3　亡くなってから3年間、春節の5日間に渡ってお経が読まれる

集まって来ます。

◆**経文の日干し**：春節の終わり（小正月）に執り行われます。お寺の世話人達が大きな経文を捧げて境内を練り歩き、村人達は頭を経文に触れてご利益を祈ります（写真５）。経文の日干しに先立って高さ20mもの仏画の開帳や降臨した神様の踊りが披露されます。この後、本格的な農作業が始まります。

◆**どんど焼き**：日本のどんど焼に似た行事が春節の間に行われます（写真６）。麦藁と柏の枝で編まれた櫓には一本の長い赤い糸が結ばれていて、櫓の周りに並んだ村人全員がこの赤い糸を手に持ち、僧侶が豊作と無病息災を祈ります。さらに櫓へ小麦の種を振り掛けた後、櫓を境内の外へ移して燃やします。またラマが松葉の枝を使って、清めた水を村人達の頭に振り掛けて祈ったりもします。

▶大川さんのホームページはこちら

- 四姑娘山
  http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm
- 女王谷
  http://rgyalmorong.info

写真４　用水路から畑へ水を引き込みます

写真５　経文の日干し

写真６　日本のどんど焼に似た行事

鄧さん、頑張る・日本探検記 12

中国講座閉校式

鄧仁有（dèng rén yǒu）

去る３月15日に中国講座閉講式を行いました。28回の中国講座を通して皆さんに中国の名勝旧跡、例えばシルクロードとか、四川文明とか、河姆渡（かぼと）文化などを紹介しました。受講したことがきっかけになり皆さんが兵馬俑展や四川文明展を見学に行きました。

閉講式の直前「中国に行きましょう、行きたい」と繰り返し話した受講生もいました。講座を受けて中国文化にこんなに興味を持ってくれたことに感動しました。

閉講式で田中教育長は挨拶の中で「論語」の「子曰く、学んで時にこれを習う、亦説（よろこ）ばしからずや」という言葉を受講生の皆さんに説明くださいました。私は閉講式の後、その資料をじっくり読みました。以前中国で「論語」を一部習いましたが、日本語の「論語」は初めてで、中国文化ですが、日本で亦再び習い、理解が深まり、孔子曰くのように、これもまたなんと嬉しからずやではないでしょうか。

閉講式の時、皆さんにささやかな記念品を贈呈しました。恥ずかしいですが、自筆の色紙です。

普段、書道が好きで、隷書などの臨書をしています。中国から手本を何冊も持ってきましたが、その中に「曹全碑」の拓本があります。私が書いたのは殆どこの拓本の字体です。書の練習はしているけれども、色紙に書くのはそう簡単なものではありません。内容選び、字の組み立て、全体のバランスなどには何回も失敗しました。結局私が書いたのは書道の作品ではなく、ただの記念品になってしまいました。

また、色紙にどんな言葉がいいかと言うのも工夫を凝らしました。殆ど中国の古典から選びました。本来、同じ文言にした方が簡単ですが、いろいろ挑戦してみました。中に「高山流水」という熟語を書きました。

これは今まで自然を表現する言葉、または、古典音楽の名前という事しか知りませんでしたが、皆さんに説明のため調べたところ、中国の古典「列子」からの出典でした。

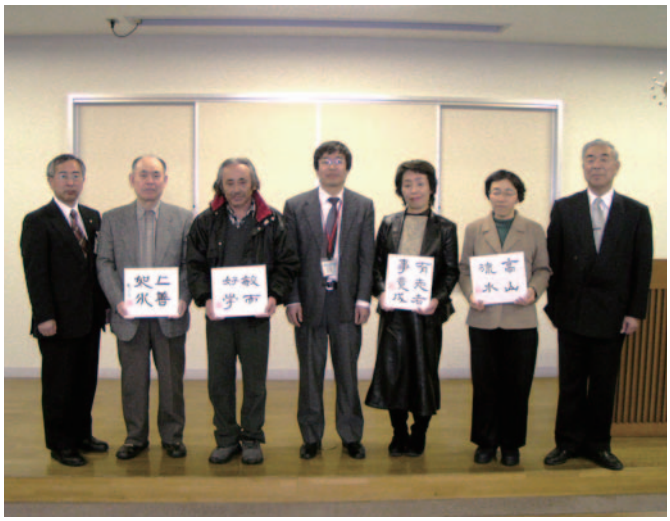
中国の春秋時代、2400年前のことですが、琴の名手伯牙が高山を思って琴を鼓せば、聞き手の鐘子期は峨峨たる高山の如しと表し、流水を思って鼓せば洋々たる流水の如しと評しました。つまり知音との意味もあります。このように調べて、更に新しい発見をしたような気分でした。これもまた、孔子曰く「よろこばしからずや」のようです。

その他に老子の「上善如水」を書きました。これは私の好きな言葉ですが、受講生の話によりますと、これはお酒の名前にもなっているそうです。これは初めて知りました。美味しいと聞きましたので、これから町民の皆さんとどこかで飲みましょう。

そのほかに「後漢書」から「有志者事竟成」という言葉も書きました。先日、六戸中学校の卒業式に出席した時、中庭の石に刻んだ同じ意味の言葉を発見しました。おそらく中国から伝わって日本語になったのでしょう。これは後漢の帝劉秀の言葉です。そのエピソードについて興味の有る方は大いに語り合いましょう。

中国講座の受講生の殆どの皆さんに最後まで参加していただいて、私としては何より嬉しいことでした。誠にありがとうございました。

今年も気軽に中国講座にご参加ください。心からお待ちしています。



中国講座閉講式で自筆の色紙を送る（中央が鄧さん）

「鄧さん頑張る·日本探検記」は、2004年（平成16年）から2006年（平成18年）の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人、鄧仁有さんの日本体験です。文章は原文のままです。

寧波での思い出

そまの　はじめ
杣野　一

昔から‘衣･食･住’といわれていますが､私は‘食’が最初にくると思います。それで‘食の国’である中国に行く事に心を決めました。つまり、私の友人である中国人の紹介により、請われて中国寧波*）に、焼きたての、‘世界で一番美味しいパン’の店を作るために協力することになったという訳です。

そこで、2002年4月～ 2003年11月、 中国寧波に滞在して‘日本のおいしいパン’作りを指導したのですが、 思いもよらないトラブル続出でした。パン作りの機械関係は良いのですが、パンを発酵させるのに適した部屋がありません。更に中国の方はパン作りについて知識がないので、どんな小麦粉を使うのか、小麦粉の他に、パン作りにはどのような材料が必要なのかという基本的なこともご存知でないですし、私は私で、パンの材料を手配する方法すらどうすればよいのか分かりません。ということで、パンの材料をどこで、どれだけ、どのようにして仕入れるのかというところから全てが始まりました。本来なら、事業を起こすに当たって先ず考えるべき事ですね。

完成したパンの店の前で（中央が筆者）

日本人は私一人です。しかし、幸いなことに日本語が出来る中国人が二人いました。この間、さまざまな紆余曲折を乗り越えてどうにか仕事を続け、パンの店開業に漕ぎ付けることが出来ました。

さて、仕事の合間には皆で人情話をしたり、パン屋の奥さんの王杯さんの話をしたり、かと思うと、王杯さんの友人が事故でなくなって、亡くなった友人の子供たちのために王杯さんが学費を出しているという家庭に呼ばれて一緒に食事をするというような機会があったりしました。

その家は、水が綺麗な東銭湖の近くなので、その時は、小さいエビを生きたまま紹興酒に入れてそのまま食べるというような料理を頂いたりしたのですが、それはとても美味しく忘れられません。それにしても、王杯さんはずっと続けて学費を援助しているのですから大変に奇特な事です。

日本語が出来る、寧波在住の袁萍さんたちと舟山から普陀山（仏教の山）へ行ったりもしました。入山料を90元払って入ると、お経が流れていました。中国のお経はまるで歌を歌っているようで、日本のお経と比べて明るい感じがしました。

「木魚を叩きながらお経を読むのは何故か？」と中国の友人に訊かれ、さてと考えてみましたが分かりません。その友人に「何故か？」と訊き返して、その理由を教わりました。中国のおとぎ話ですが、下記のような話しがあるそうです。

『西遊記の三蔵法師たちが、仏教の経典を求めにインドに行く途中、チベットの大きな川（ラサ川）に差し掛かり、その川を渡っている時に、大きな魚が出てきて、三蔵法師に、「私は昔は人間でした。インドに着いたらお釈迦様にお願いして人間に戻してくれるように頼んでください」といいました。

三蔵法師一行はやがてインドに着き､沢山の経典を持って帰る途中、チベットのラサ川にさしかかると、川から再び例の大魚が水面に浮かび出てきました。

ところが、三蔵法師は、大魚から「人間に戻して欲しい」と頼まれていたことをすっかり忘れてしまっていましたので、大魚は怒って経典を全部飲み込んでしまいました。そこで孫悟空が如意棒で、大魚を叩いて、叩くたびに、大魚は１巻、１巻、お経を吐き出しました』

さて、最後に寧波在住の袁萍さんに、お礼を言わなければなりません。滞在中は通訳をしていただいた上に、普陀山を案内していただき、大変お世話になりました。深く感謝、申し上げております。

*中国浙江省に位置する副省級市

スリランカ・ケラニヤ便り ⑪

ガンパハを訪ねて

為我井 輝忠（ケラニヤ大学人文学部現代外国語学科・日本語教師）

日本に帰国してからスリランカで印象に残っている場所はとこかと問われると、それは何か所もあり答えるのが難しいが、その中でもGampaha（ガンパハ）は最も忘れることができないところの一つと言ってもよいだろう。

ガンパハはコロンボから北へ50～60km行ったところで、列車で1時間強ほどの都市である。観光地ではないので、これといって旅行者が訪れるような特別なところは何もないが、私は5回訪ねたことがある。

ここには「平和寺」という仏教寺院があり、長く日本に住んでいたソーマシリというお坊さんがいる。もう20年位前に初めて日本でお会いし、それからも何度かお会いしたことがあった。初めてお会いした時、師はまだ大学で勉強中だったので日本語はあまり出来なかったが、今回スリランカでお会いして、その日本語の上達振りや日本人と同じように冗談や軽口を言うのを聞いて感心させられてしまった。大学卒業後も日本には長く住んでいて、千葉県香取市にある「蘭華寺」で責任者として働いてきた。

なぜソーマシリ師にスリランカで会うに至ったかと言うと、‘わんりぃ’の会員でもある松林蓉子氏が私のスリランカ行きを知り、ぜひ師を訪ねるように勧めてくれたからである。初めてガンパハに師を訪ねたのは、2013年1月で、その時は松林氏がスリランカに来られて平和寺に日本文化センター建設に寄付金を寄せられて、今回その発会式があり、松林氏も来られるということでご案内をいただいた。2階建ての大きな建物の2階部分に日本文化を紹介するものがたくさん展示されている。着物、陶器、書道、書籍、絵画等日本を紹介するあらゆるものが置かれていた。

図書館贈呈式で挨拶される松林蓉子氏とソーマシリ師

その後も10月に図書館のオープニングと老人ホーム建設発会式があるということで、再度案内をいただいて、ガンパハに赴いた。図書館は1月に訪れた時にはまだ建設中で、本当は4月にオープニングの予定であつたが、建設が遅れ、10月になってしまったそうだ。老人ホームの方は平和寺から車で20分ほどの静かなところにあり、今回は土地の確認と地鎮祭が行われた。日本から来られた2人の松林氏の友人と共に参加することが出来た。これから建設が始まり、完成までにはまだ時間がかかるものと思われる。

松林氏は長年（恐らく10年以上も前から）ソーマシリ師を援助していて、事あるごとにスリランカを訪れ、師の手助けをしている。2人の仏教を通しての交流は素晴らしいものだと思う。それほど仏教に強い関心があるわけではないので、私にはとても出来ないことであるが・・・。

私はこの他にも5月と7月にもガンパハを訪れた。5月には平和寺で開催されたペラヘラ祭りを見学し、7月には私が教えていた学生の出身高校で文化祭を見に出かけた。

ペラヘラ祭りというのは、スリランカ各地で行われているが、平和寺で行われる祭りは毎年5月のポーヤデーの翌日の夜に行われる。伝統的な踊りや楽隊をはじめとして多数の象の行進、アクロバティックな踊り、キャンディアン・ダンス等々、3時間にも及ぶ仏教的な祭典で、ペラヘラと言うのは「行進・行列」を意味する。これまでアジア最大の祭りと言われるキャンディの仏歯寺によるペラヘラをはじめとして、あちこちでこの祭りを見てきたので、ここ

バンダラナイケ・カレッジで日本語を学んでいる学生たち

クラシックなたたずまいを見せるガンパハ市役所

での祭典にも興味を覚え見ることが出来た。夜８時から12時近くまでのたった一晩だけの祭りで、地域の人々と共に見ることが出来た。

７月には教え子の出身高校で文化祭（Education and Science Exhibition 2013）があり、他の日本人の先生や２人の学生と共に出かけた。この高校はBandaranaike College（バンダラナイケ・カレッジ）という名前の男子高校で、スリランカではかなりの名門高校のようだ。文化祭と言っても日本の高校の文化祭とは異なり、かなり高度な研究発表がいくつもあり、入場料を払った理由も納得できる内容であった。

教え子によると、日本語クラブというグループの展示があると言うので、案内してもらったが、大きな教室を利用して日本の文化、言葉、習慣、食べ物、習字などを紹介していて、生徒たちは皆立派な日本語を話していた。その上、生徒たちは将来日本語を学びたいと話していて、きっと将来は日本との懸け橋になる人材が生まれることだろう。

中国語学習クラブというのもあった。他にも法曹、自然科学、写真、物理、鉄道、飛行機、音楽等々様々な展示と実演があり、どれも素晴らしい内容であった。テレビでもニュースの時間にレポートされていた。

ガンパハには特別見るべきものはないと最初に書いたが、しかし、ぜひとも記しておきたい建造物がある。ガンパハにはかってのこの地域の大富豪の

ホーリークロス教会

屋敷が残されていて、現在は市役所として使われている。インド様式の建物で、見るべき建物と言えよう。もう一つはカトリック教会であるが、たまたま５月にガンパハを訪ねた時に案内していただいたもので、かなり古そうな教会であった。Holy Cross Church（ホリー・クロス教会）といい、こちらもガンパハではぜひ訪ねてみたいところと言ってよいだろう。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を 1cm ほどを残して切り取り、おついでの折に田井にお渡し下さい。

コロンボ国立博物館とその界隈 その2

赤岡健一郎（日本スリランカ武道協会 日本スリランカ文化交流協会）

ゴールロードをどんどん歩いて行くと、海側にアメリカ大使館が見えてきます。大使館の先のコルピティヤの信号を左方向に曲がって、アナンダ通りを進めばコロンボ国立博物館に到着です。でも、折角コルピティヤまで来たのですから、博物館に行くのは後回しにして、もう少しゴールロードを直進してみましょう。

海側の歩道を歩いて行くとマクドナルドを過ぎた辺りにスリランカ紅茶局(Sri Lanka Tea Board)があります。さすがに国営店、スリランカで生産されているほとんどの紅茶が集められていて、適正な価格で購入することが出来ます。

コロンボ国立博物館
（フリー百科事典・ウィキペディアより）

紅茶局の周辺、特にゴールロードを渡って住宅地に入っていくと洒落たカフェが集まっているので、ここいら辺で一休みするのも良いでしょう。

紅茶局から更に先に進むとベアフットに着きます。この店は、今年になって立て続けに放映されたTVのスリランカ特集番組でも紹介されていました。

手織りの布製品を中心にスリランカの雑貨を販売しているので、此処でお土産物を探すのも良いですね。地下売り場にはスリランカに関する写真集なども置いてあるので、少し重くはなりますがご自分へのプレゼントにどうでしょうか。ベアフットを過ぎるとバンバラピティヤの信号に着きます。

この信号から少し海方向に行くとマジェスティックシティというショッピングセンターがあります。センターの中にはお土産物屋の他に食料品店、サリーやカジュアルウェアの専門店、電気屋や靴屋など多種雑多な店が軒を連ねています。地階にはフードーコートがあるので気軽に昼食を食べる事も出来ます。スリランカの人達の日常生活に触れる事の出来る場所なので、是非一度はお出かけください。

バンバラピティヤから先にも面白い場所はあるのですが、此処からコルピティヤに戻る事にしましょう。戻るにしても、同じゴールロードを歩くのでは芸が無いのでゴールロードと並行して1本内陸側を通るデユプリケーションロードに行ってみましょう。

デユプリケーションロードについては本誌2007年1月号で、「道路の両側にスリランカの最先端の流行品を扱う店、スイス・中国・インド・韓国等のレストラン、洒落た文房具店、昔ながらの商店等が混在しています」というように紹介しています。現在ではスイスレストランは別の場所に移転し、昔ながらの商店も少しずつ建て替えられてお洒落な店が増えてきているようです。

数多くあるデユプリケーションロードとゴールロードを結ぶ横丁にも現代風のブティックやカフェの類が多くなってきています。出来るだけ、この様な横丁に入ってみましょう。両ロードは150～200m程度しか離れていないので迷子になっても大したことはありません。半径数百メートルの範囲内をウロウロするだけなので、しばらく歩けば前述したどこかしらのランドマークに当たります。迷子になるのも旅の醍醐味と考えて、積極的に横丁に足を踏み入れて下さい。ランドマークが見つからなければ、地元の人に声をかけて下さい、きっと判り易い場所まで案内してくれますよ。

さて、デユプリケーションロードを歩いて行くと、左側角にリバティプラザがあるT字路に着きます。此処が前述した、コルピティヤの信号を左方向に曲がったアナンダ通りです。アナンダ通りを真っ直ぐ進んで、中央図書館がある交差点を右に曲がれば国立博物館の正面玄関です。正面玄関の外には、たくさんの三輪タクシーやラジオタクシーが客待ちをしているので、歩き回って疲れている様ならば、帰り道にはホテルまでタクシーを使うのも良いですね。

コロンボ国立博物館の説明を少しだけしておきましょう。博物館は 1877 年に英国植民地政府によって建てられたコロニアル様式の建物で、前庭の芝生広場には当時のセイロン総督の像が残されています。建物は 2 階建て、正面玄関から中に入ると 1 階の正面に大きな仏像が置かれています。左周りに進むと、スリランカ最初の王朝であるアヌラダプーラ王朝の展示室から始まって、王朝が遷都するのに従って各王朝の展示室が最後の王朝となるキャンディの展示室まで順番に設けられています。2 階には、象牙や木彫りの工芸品や悪魔祓いの仮面などが展示されています。建物の外観に比べると所蔵品は少ないように感じられます。

まだまだ元気だと言う方は、博物館の裏手にある広大な公園（ヴィハーラ・マハー・デーヴィ公園）を突っ切ってタウンホール周辺に行ってみましょう。

タウンホールはコロンボの市庁舎で、博物館と同じく真っ白なコロニアル様式の建物で大きな円形のドームが遠くから見えるので、直ぐに判ります。前述のベアフットと同様に、外国人観光客や在留外国人に絶大な人気のあるパラダイスロードとオデールというショッピングセンターがあります。此処には、お土産物に適したスリランカの雑貨品を扱う店が何件もあるので、博物館とは別に、帰国前に別途お出かけになった方が良いかもしれません。

これだけ歩き回ると、そろそろ疲れが出てくる頃でしょう。ゴールフェースホテルの隣にある、ゴールフェースグリーンと呼ばれる海に面した広大な緑地広場、此処はイギリスの植民地時代に造営され、当時はイギリス人が草競馬やクリケットを楽しんでいたそうです。この広場までタクシーで戻って、地元の方々と一緒にインド洋に沈む夕日を眺めるのも良し、隣のホテルのテラスで夕日を眺めながら、スリランカ料理を肴にビールを飲むのも良いでしょう。お疲れ様でした。

サハ共和国・ヤクーツクだより ⑩

杉嶋俊夫

こうして連載を続けているとそれなりに反響があって、嬉しく思います。今回は主に、今までに寄せられた感想や質問にお答えする形で書いてみたいと思います。

◇食べ物について

私は寮で生活していたので一般家庭の食卓を覗く機会はほとんどありませんでした。（元）同僚の話や、スーパーに並んでいた食材・お惣菜を見た印象では、他のロシアの都市とほとんど違いはなく、普段はロシア料理を食べているようです。ヤクーツクで今では主食となっているパンはロシア人が持ち込んだもので、豚・鶏を食べるようになったのも生活様式がロシア化してからのことらしいです。それ以前は肉といえば馬肉・牛肉だったようです。

ちなみに、私がよくお世話になった北東連邦大学の食堂のメニューは大雑把に言うと、スープ、パン、サラダ、肉類（ローストチキンやハンバーグの類）、菓子（ケーキ・クッキー類）、紅茶・コーヒー。他のシベリアやロシア西部の大学食堂のメニューと全く同じでした。

“日本食レストラン” についても少し触れておきます。

日本料理店 YAMAMOTO　日本のテレビ番組でも取り上げられた日本料理店。この写真では見づらいですが「幸運」、「人生」、「食欲」、「富」と書かれています。日本人の目で見るとあまり味わいのない字体で・・・。

ヤクーツク市内に五軒ぐらいあります（**写真1・4**）。私が入ったのは（**写真4**）のほうです。どの店もメニューは似たりよったりで、一応日本語の名称はついていても“本物”とはかけ離れた料理が多いようです。一番人気があるのはやはり寿司。といっても、大半はアメリカで発明されたロール寿司（巻き寿司）で、私は

苦手なので食べませんでした。私が注文した親子丼は日本とほぼ同じ味付けで、おいしかったです。

気温について

滞在中の気温について書きます。3月中旬の気温はマイナス15度前後、4月中旬は0度前後、4月下旬にプラスに転じ、メーデー（5月1日）は15度近くまで上がりパレードに参加しているうちにうっすらと汗をかくほどでしたが（**写真2**）、その後2か月間、気温はかなり激しく上下を繰り返しながら上昇していきました。「異常気象」は、ユーラシアの東の端でも激しさを増してきているようです。

大学の（元）同僚達

・・・まだ全く触れていませんでしたね。“幸い”、8割以上が女性、しかも、私よりも年下でした・・・。陽気で元気な人ばかりで、みな親切にしてくれました。大学の教員・職員はロシア人よりもサハ人の割合が圧倒的に高く、私がお世話になった東洋諸言語学科も全員サハ人でした。教員は大学院に入って学術研究を行うのが一般的で、昨年も2名、日本語教員が修士号を取りました（**写真3**）（厳密に言うと、日本の「修士号」よりもレベルは高いです）。

サハは早く結婚するカップルが多く、元同僚たちもその多くが子育てに追われています。出産後3年間は十分な育児手当をもらって仕事を休むことができるそうですが、実際は3年待たずに復帰する女性も珍しくないとか。子育て・授業・研究の3つをこなす努力とバイタリティには唯々頭が下がります。

ヤクーツクの姉妹都市

1990年代に山形県の村山市がヤクーツク市と協定を結びました。交流が弱まった時期もあったそうですが、数年前、北東連邦大学にいらした日本人教師のかたの尽力により、また活発になりつつあるようです（**写真4**）。

本当に時が経つのは早いもので、私がヤクーツクに赴任した日からちょうど1年が過ぎました。私の滞在期間はたかだか4か月ですし、バランスのとれたヤクーツク市の紹介ができたとは思っていません。サハ共和国やシベリアに興味を持っていただくためのきっかけ作り程度の役割が果たせればいいと思って今まで書かせていただきました。もう少し、書き足りなかった点を補足して、おそらく次回で最終回とさせていただくことになると思います。

学生の浴衣をなおす教師たち　5月1日のメーデーのパレードが出発する前に一枚撮らせてもらいました。この日は、昼過ぎに気温が15度ぐらいまで上がりました。

修士号の授与を祝うパーティー　ヤクーツクでは、修士論文の公開審査にパスしても、正式に修士号が与えられるまで何か月もかかるそうです。この日は、日本語教師2名と中国語教師1名にようやく与えられ、皆で祝いました。

寿司バーの「むらやま写真展」　私が入った市内の日本料理店FUJIYAMA。出入り口に、ヤクーツクの姉妹都市、村山市の自然や伝統行事の写真がたくさん貼ってありました。

中国の笑い話 14（「365夜笑話」より）

第34話：教育の成果

ある日、父親が子供を連れて玩具を買いに出かけた。家に帰ってから、財布が無いのに気が付いた。慌ててポケットをあちこちひっくり返して探したが見つからず、冷や汗を流していた。それを見ていた子供が父親に聞いた。

「お父さん、何を探しているの？」

「財布が見つからないんだよ」

「僕見たんだけど、さっき、お父さんが買物している時、泥棒がお父さんの財布を持って逃げて行ったよ」

父親は、それを聞くと、思わず子供の頬に平手打ちを加えて言った。「ばか者！どうしてその時に言わなかったんだ！」

子供は、恨めしそうに父親を見ながら言った。

「お父さん何時も言っているでしょ！『泥棒を見ても余計な口出しをしてはいけない。面倒に巻き込まれないように気をつけなければいけない』って」

第35話：ホントの話？

「パパ、雌鶏の足は、どうしてこんなに短いの？」

「お前は、そんなことも分からないのか？ 雌鶏の足が長かったら、卵を産み落とす時に、卵が皆割れてしまうじゃないか。」

（有為楠 訳）

《‘わんりぃ’掲示板》

◇わんりぃの催し

小籠包を作って交流しよう！

小さな肉まんのような小籠包。味わった事のある方なら、うっかり蒸したて小籠包を口に入れて、迸り出る熱々のスープで口の中を火傷しそうになった体験をお持ちでしょう。秩父の山西省友好記念館・神怡館の料理講座で、何媛媛さんがこの小籠包の作り方を指導する事になりました。これまでも、神怡館の料理講座は‘わんりぃ’の会がレシピ提供などで協力してきましたが、小籠包のレシピがありません。それなら、いっそのこと、レシピ作りを兼ねて‘わんりぃ’の皆さんが交流する機会にしましょうということになりました。何媛媛さんを囲んで、ご一緒に小籠包作りに挑戦されませんか。

▲まちだ中央公民館6F・調理実習室

〒194-0013 東京都町田市原町田6-8-1／小田急線町田駅南口徒歩5分／JR横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分

■2012年4月8日（火）　■11：00～　■会費：1000円　■定員：先着15名

■当日メニュウ（予定）：1.小籠包、2.黄瓜炒鶏旦、3.豆腐炒三鮮　他

◆申込み：☎042-734-5100（わんりぃ）　E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp

◇わんりぃの催し

中国語で読む・漢詩の会

▲場所：まちだ中央公民館・学習室7

▲月日：2014年4月13日（日）
5月18日（日）

▲時間：10：00～11：30

▲講師：植田渥雄先生
（現桜美林大学孔子学院講師）

▲会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）

▲定員：20名（原則として）

＊録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎050-1531-8622（有為楠）
E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp（同上）

◇わんりぃの催し

ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！

◆動きやすい服装でご参加ください

まちだ中央公民館・6F視聴覚室

▲4月22日(火)、5月20日(火)

▲時間：10:00～11:30

▲4月の練習歌「翼を下さい」

▲講師：Emme（エメ）（歌手）

▲会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）

▲定員：15名（原則として）

●申込み：☎042-735-7187（鈴木）
E-mail：wanli@jcom.home.ne.jp（田井）

◆まちだ中央公民館行き方：小田急線南口徒歩5分／横浜線ルミネ口徒歩3分 町田市原町田6丁目8-1 町田センタービル109

「中国文化センター　漢語の家 & 健康の家」 2014年4～5月のスケジュール

参加無料

◆**漢語の家**（第一、第三木曜開講　18：30～20：00）
毎回あらゆるジャンルの講師が生活、社会、文化など中国の最新事情や身近な話題を中国語で紹介したり、参加者の皆様同士で中国の事情などについて情報交換しながら、楽しく交流します。

◆**健康の家**（第二、第四木曜開講　18：30～20：00）
講師：嵩山少林寺第34代最高師範　秦 西平先生
中国武術を取り入れた体操で皆様の健康、ダイエットなどに効くさまざまな健康法をアドバイスいたします。

▲**会場：東京中国文化センター**（〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-5-1　37森ビル1F）
日比谷線「神谷町」駅4番出口より徒歩約5分　銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩 約7分）

▲**申込方法**：参加は1回から可。参加者氏名、電話番号、メールアドレスと参加希望日を明記の上 info@ccctok.comへお申込み下さい。

▲**問　合　せ**：東京中国文化センタ　**Tel**：03-6402-8168　**Fax**:03-6402-8169　**Mail**:info@ccctok.com

竹田武史写真展
『ヘルマンヘッセに捧ぐ　シッダールタの旅』
http://www.konicaminolta.jp/plaza/schedule/2014april/gallery_c_140404_event.html

●**コニカミノルタプラザ・ギャラリーC**
JR新宿駅東口1分新宿高野ビル4F
●2014年4月4日(金)～4月14日(月)
●10：30～19：00(最終日/15：00)
◆**竹田武史トークショー**
「旅と写真とヘルマンヘッセ」
聞き手／金川功（新潮社編集者）
◆4月5日(土)14：00－15：00
◆50名(先着順　当日会場にて整理券配布)
●問合せ：☎03-3225-5001 コニカミノルタプラザ

岡上中国語研究会新会員募集

中国語を中国人先生から直接聞いて話して勉強してみませんか？ 中国語初めての方大歓迎。直接見学も大歓迎。

●毎週土曜日 10:00～12：00
●麻生市民館岡上分館（215-0027 麻生区岡上 286-1）
●講師：劉　冠群　先生（北京出身）
●会費：月謝 3,500 円
●問合せ：☎ 044-988-2031（本間）
E-mail: tizm2008@jcom.home.ne.jp（和泉）

●**「詩人尹世霖の童詩の世界」**が新しく連載されます。
'わんりぃ' 2013年12月号で、会員の松林蓉子（浄蓉）さんのご紹介で、「スリランカの民話」復刻のいきさつを書いてくださったのが金子總子さんで、この時、松林さんから「スリランカの民話」と共に、「尹世霖・現代中国朗誦詩の世界」(金子總子編著)が送られてきました。

この本に収められた尹世霖の詩は、こども達の目線で見た自然だったり、こども達を代弁して伝えるこども達の気持ちだったり、そして、「こども達よ、健やかに育て」と祈る尹世霖の心そのものだったりの、平易な中国語で書かれた親しみやすいものでした。思わず引き込まれ、金子總子さんに、童詩作家尹世霖の詩のご紹介をお願いし、気持ちよく引き受けて頂きました。皆様も是非、童心に帰って日本語の方でも原文の詩のほうでも声を出して読んで見て欲しいと願ってます。（田井）

'わんりぃ' 192号の主な目次

北京雑感(83)北京の食事 ……2
諺･慣用句(28)「水魚の交わり」……3
媛媛讲故事(62)「十五貫」Ⅱ……4
中国-城市めぐり(32)「通化市と集安･3」 ……6
詩人尹世霖の童詩の世界 ……9
砂漠を越えた冒険者達 ……10
四姑娘山･写真だより32 ……12
日本探検記(12)「中国講座閉校式」……14
寧波での思い出 ……16
スリランカ･ケラニヤ便り⑪ガンパハを訪ねて……16
スリランカ(76)「コロンボ国立博物館とその界隈Ⅱ」…18
サハ共和国･ヤクーツクだより⑩ ……19
「中国の笑い話」(14)……21
'わんりぃ' 掲示板……21

【2014年4月の定例会及びおたより発送日】
◆定例会：4月18日(金)　三輪センター・第3会議室　13：30～
◆5月号おたより発送日：4月30日(水) 三輪センター・第三会議室 10：30～　お弁当を持参下さい。